

トマス・アキナス『神学綱要』抄訳 （第2部第9章および第10章）

Chapter 9 and 10 in Part 2 of *Compendium Theologiae*: translation
of selected chapters from *Compendium Theologiae* by Thomas Aquinas

山口隆介
Yamaguchi Ryusuke

要 約

『神学綱要』 *Compendium Theologiae* は、トマスの著作の中でもあまり研究される事がない著作である。時として神学大全の要約を意味するタイトルを付けて出版される事すらあるが、しかし、仔細に読んでいくと、神学大全で論じられている議論をより詳細に論じているものや、思想的な示唆を与えてくれる箇所などがあり、研究する意義の十分にあるテキストである。

本稿の大部分は、『神学綱要』の未完に終わった第2部第9章の訳であり、『神学綱要』の完成している部分全体を通して最も長い章である。内容は主の祈りの第2の願い「御国が来ますように」についての議論であるが、『神学大全』で同じ願いに言及するよりはるかに長く論じられている。第10章は、トマスが筆を折った箇所であり、何者かによる加筆がなされている。

邦訳がないテキストで大きな議論がまとまっている箇所を取りだし、この著作について知る手掛かりを供したい。

Key Words : *Compendium Theologiae*, 『神学綱要』, 主の祈り, 神の国

第9章 第2の願い、すなわち我々を栄光に与る者として下さるよう

神の栄光を求め願う思いの後に続くのは、人間が、神の栄光に与る者となることを願い求めることである。そしてそれゆえ、第2の願いはこうなる。「あなたの国が来るように」。このこと〔第2の願い〕については、先に述べられた願いの場合と同じく、まず、神の国を求めることが適切であることを考えなければならない。また次に、人間がそれを手に入れるに至り得るということを考えなければならない。また第3に、〔人間が〕自分の力ではそれに到達できず、神の恵みに助けられることによってのみ到達できることを考えなければならない。またその上で第4に考えなければならないのは、どのようにして、我々は神の国の到来を願うべきかということである。

それゆえ、最初のことに關してはこう考えるべきである。おのおののものにとって自然本性的に欲すべきものが固有の善である。それゆえ、善を適切に定義するなら、すべてのものが求めているものだということになる。また、固有の善は、おのおののものにとって、それによりそのも

のが完全にされるものである。というのは、我々がおのおののものを善と言うのは、固有の完全さに達しているからである。一方、善を欠いているというのは、固有の完全さを欠いているということである。それゆえ、その帰結として、おのおののものがその完全さを求めるということになり、それゆえ、人間もまた自然本性的に完成することを求める。そして、人間の完成には多くの段階があるので、特にそして主に、その〔人間の〕欲求に関して自然本性に適うのは、その〔人間の〕最後の完成に目を向けることである。また、かくかくの善が知られるかくかくの証拠は、人間の自然本性的な欲求がそのうちで休まるということである。すなわち、人間の自然本性的な欲求は固有の善、すなわちなんらかの完全さのうちに成り立つものでなければ向かわない、その帰結として、何か欲し求められるべきである限り、その帰結として、決して人間は最後の完成には到達していないということになる。

またさらに、何か欲し求められるべきだということには、2種類のものがある。1つには、欲し求められているものが、何か他のもののゆえに求められているという時のもので、この場合、それが手に入れられてもなお、欲望は休まず、他に移らざるを得ないということになる。いま1つの場合は、人間が欲し求めるものを手に入れるのには不十分だという時のもので、例えば、中くらいの食事では生身の存在を支えるのに十分でない¹ような場合のことであり、この場合には、自然の欲求は飽き足りない。それゆえ、人間がまず、そして主に欲し求める善は、他のもののゆえに求められるのではなく、人間にとって十分なものである。また、このような善が一般に幸せⁱⁱと呼ばれている。それが人間の主な善である限り。すなわち、ある人々が幸せだと我々が言うのは、彼らを善く存在しているⁱⁱⁱと我々が信じるからである。また、卓越している〔卓越した幸せである〕ということを表す限りでは、それは至福と呼ばれる。そして、安らぎを表す限りで、それは平和と呼ぶことができる。すなわち、欲求の静まりは内的平和であると思われるからである。それゆえ、第147篇でこう言われるのである。「お前の領地に平和をもたらし方」と。

それゆえ、物的な善のうちに幸せあるいは至福はあり得ないことは明らかである。というのは、まず、〔物的な善は〕それぞれのために求められているわけではなく、本来的に他のもののゆえに欲し求められているのからである。すなわち〔物的な善が〕人間に適合するのは、その〔人間の〕物体すなわち体としての面での話である。そして人間の体は、靈魂をその目的とした秩序をなしているが、というのは、あるいは、体は〔それを〕動かす靈魂の道具であるが、道具というものはすべてそれを扱う技術のためのものだからであり、あるいは、体は靈魂に対し、質料の形相に対する関係にあるからでもある。また、形相は質料の目的であり、可能態の現実態〔素質の活動、あり得ることが実際にあること〕でもあるからである。このことの帰結として、富のうちにも名誉のうちにも健康のうちにも、あるいは美のうちにも、また以上のような類のどんなものの中にも、人間の最終の幸せは成り立たない。

〔物的な善のうちに幸せあるいは至福はあり得ない〕次の理由は、物的な善で人間にとって十分だということはあるからである。というのは、最初の意味では、人間のうちには2種類の欲求の力、すなわち、知性の欲求の力と感性の欲求の力があり、その帰結として欲望も〔知

性の欲求という欲望と感性の欲求という欲望の] 2種類あり、知性の欲求という欲望は、主に知ることのできる善に向かう、すなわち物的な善が及ばない〔善〕に向かっているからであり、別の意味では、物的な善は、言わば事物の秩序のうちで最も低いものとして、集中しておらず拡散している善を受け取り、すなわち後者が、その〔物的な〕面での善性を、例えば快を有するということになり、前者は他のものを、例えば体の健やかさを有し、他の事柄についてもまた同様だからである。それゆえ、それらのいずれのうちでも、人間の、すべての善へと向かう^{iv} 欲求は満足を見出し得ない。それらが多くても、そのうちに満足が見出されることはない。いかに〔それが〕多くなろうとも。というのは、それらは普遍的な善の無限さに不足しているからである。それゆえ、『コヘレトの言葉』第5章〔第9節〕ではこう言われている。「吝嗇な者は金銭に満足することがない」。

第3には、人間は知性によって、場所に関しても時間に関しても限られることがない普遍的な善を捉えるので、したがって、人間の欲求は、知性による把握に適している限りで、時間に関して限定されるべきでない善を欲し求めるのである。それゆえ、永久に安定することを欲し求めるのは、人間にとって自然本性的である。このこと〔永久に安定すること〕は物的なものの中には見出し得ない。それらは、消滅と多くの実体に変化するからである。それゆえ、物的な善の場合、人間の欲求は求めている満足を見出さないことにある。したがって、それら〔物的な善〕のうちには人間の最終の幸せはあり得ない。

しかし、感性的な諸力は、物体に関してはたらく体の器官によってはたらくものとして物的なはたらきを有しているの、その帰結として、感性的な部分の諸々のはたらきのうちにもまた、人間の最終の幸せは成り立たないということになる。すなわち、例えば、どのような肉の快楽のうちにも、人間の最終の幸せは成り立たない。

また、人間の知性が、物体に関するならかのはたらきを有しているのは、人間が思弁知性によっても物体を知り、実践を通じて物的なものを扱うからである。そしてそれゆえ、物的なものを志向する思弁知性あるいは実践知性固有のはたらきそのものうちにも、人間の最終の幸せ、また完成は置かれ得ない。

また同じく、人間知性の、靈魂が自分自身を省みるはたらきのうちにもまたあり得ない。このことには2つの理由がある。まず、靈魂はそのものとしてのみ考えるなら、至福ではない。さもなくば、それ〔靈魂〕が至福を獲得するためにはたらかねばならないことになるからである。至福は、自分自身を志向するだけでは獲得されることはない。

次いで、幸せは、先立つ箇所^vで言ったように、人間の最終の完成である。そして、靈魂の完成は、その固有の働きのうちになり立つので、したがって、その最終的完成は、その最善のはたらきによって考えられることになる。それらは、最善の対象によってあり、はたらきは対象に即して特殊化される。また、靈魂は、そのはたらきに向かい得る最も善いものである。というのは、何かそのものとしてより善であると知るからには、人間の最終の至福が、自分自身あるいは他の〔自分〕より上位の実体すべてに向かうはたらきのうちに成り立つということは不可能である。もし、

何かがそれらより善いものであるなら、人間の靈魂の働きはそれへと向かい得る。また、人間の働きは、あらゆる善に向かっている。というのは普遍的な善は、人間が、知性によって普遍的な善と把握しているがゆえに欲し求めているものだからである。それゆえ、どの段階にも善は及んでいるのであり、なんらかの仕方では人間の知性のはたらきは広がっている。またしたがって、意志もそうだ。そして、善は神のうちで最高度に見出される。彼〔神〕はその本質によって善であり、すべての善の始原である。それゆえ、その帰結として、人間の最終完成とその〔人間の〕目的である善は、神から離れないでいることのうちにあるということになる。だから、『詩編』第72章〔第28節〕のあの言葉がある。「私にとって、神から離れないでいることは善である」。

これがまたはっきり明らかになるのは、ある一定のものの分有を考える場合である。すなわち、個々の人間がみな、この陳述〔人間であるという陳述〕が真であると受け容れるのは、まさに種の本質を分有していることによってである。また、彼らのうちの誰も、他の人間との類似を分有しているということで、人間と言われているのではなく、種の本質を分有していることによるのみそう言われているのである。やはり、それ〔種の本質〕を分有するためには、あるものが他のものを、生殖という経路を通じて導き出す、すなわち父が子を生ぜしめるのである。そして、至福、あるいは幸せは、完全なる善に他ならない。したがって、神の至福の分有のみによって、すなわち、人間の善性のみによって、すべての至福の分有者は至福であるのでなければならないということになる。たとえば、あるものが他の者によって至福に向かうべく助けられている場合でも。それゆえ、アウグスティヌスは『真の宗教について』^{vi}でこう言っている。「我々は、天使たちを見ているから至福なのではなく、真理を見ているからそうなのだ。それ〔真理〕のおかげで我々は彼ら〔天使たち〕を愛し、そしてこれら〔天使たち〕と共に我々は喜ぶ」。

また、人間の精神が神のうちへ運び入れられるということは2種類の仕方では起きる。その1つは、それ自身によって、他の仕方では、他のものによって。他のものによってというのは、例えばそれ自身のうちに見られる時、またそれ自体として愛されるような場合である。一方、他のものによってというのは、まさに被造物から、精神が神へと高められるということである。だから、『ローマの教会への手紙』第1章〔第20節〕のあの言葉がある。「神に属する目に見えない事柄は、作られたものを通して、知られたものと認められる」。そして、完全な至福が、他のものによって神に向かうことの中に成り立つことはあり得ない。というのは、まず、至福という語は人の行ないすべての目的を表すので、真の、完全な至福というものは、それが限界という面を持っていないということの中に成り立つのではあり得ず、目的への変化という面を持っていることの中に成り立ち得るのである。そして、神が他のもの〔神以外のもの〕を通して知られ、愛されるということは、人間の精神のある種の運動によってなされるのである。何かあるものを通してそれ以外のものに到達するという限り。したがって、以上のこと〔他のものによって神に向かうことの中に〕真の、完全な至福はない。

次に、人間の精神が神のうちにあって離れないということの中に、その至福は成り立つというなら、その帰結として、完全な至福は神への完全な内属を必要とすることになる。また、なん

らかの被造物を通して人間の精神が神に完全に内属するということは、知によっても愛によってもあり得ない。すなわち、被造の形相は、神の本質を表すには無限に不足している。したがって、下位の序列に属する形相によって上位の序列に属するものが知られること、例えば、物体によって霊的実体が知られること、あるいは要素によって天体が知られることがあり得ないように、なんらかの被造の形相によって神の本質が知られることはなおさらあり得ない。しかし、下位の物体を考えることで上位のもの本質を我々が否定的に知ること、例えば重くも軽くもないもの、つまり天使についてのことだが、物体を考察することを通してそれを否定的に、非質料的で、非物的なものとして我々が捉えるように、神についても被造物を通して、なんであるかをではなく、なんでないかを我々は捉えるのである。また同じく、神の善性はすなわち無限の善性は、それゆえ、諸々のもののうちの善性は神から生じているもので、神の好意によるものであるが、精神を、神への完全な愛まで高揚させるわけではない。したがって、真の完全な至福は、精神が神にそれ〔神〕以外のものによって内属するという形では成り立ち得ない。

第3に、正しい順序ではあまり知られないものは、より知られているものを通して知られるものなので、より善でないものもまた同じく、より善であるものを通して愛されるのである。それゆえ、神は、第1の真理にして、最高の善であり、それ自体としては最も知るべきであり、最も愛されるべきであるので、自然の順序でなら、何もかも御自身として知られ、愛されるべきであることになる。したがって、もし、誰かの精神が、神の知と愛とに、被造物を通して到達せしめられねばならないとしたら、そのようなことは、その人の不完全さのせいで起きているということだ。それゆえ、完全な至福が達成されることは決してない。それ〔完全な至福〕は、あらゆる不完全さを排除する。

したがって、〔結論として〕残るのは、完全な至福は、知ることと愛することによって精神が神に、〔神〕御自身によって内属することにあるということだ。また、臣下たちの体制を整え、治めるのは王がすることであるので、人間のうちでは、人間以外のものが〔秩序を〕整えられることによって、統べると言われる。それゆえ、使徒は『ローマの教会への手紙』第6章〔第12節〕でこう戒めているのだ。「あなた方の死すべき体のうちでは罪が王であってはならない」。したがって、完全な至福のためには、神御自身が御自身によって知られ、愛されるということ、すなわち彼〔神〕によって精神が高く上げられることが必要であるので、善なる者たちのうちでは真に、完全に、神が王である。それゆえ、『イザヤ書』第49章〔第10節〕ではこう言われているのだ。「彼らを憐れむ者が彼らを統べ、水の泉で彼らに飲ませるだろう」。すなわち、彼らは〔神〕御自身を通して、あらゆる最も力ある善のうちで再生されるだろう。

というのは、こう考えるべきだからだ。すなわち、知性は、外的な視覚の場合も石の形相を通して石を見ている場合と同じく、なんらかの形象あるいは形相を通して知っているものすべてを理解しているので、知性が神をその本質で視ることは、なんらかの形象あるいは形相を言わば神の本質を再現するものとしてそれを通して視るということになり、それはあり得ない。すなわち、我々が見〔て知っ〕ているように、事物の序列として下位のものの形象を通し、上位の秩序のも

のが再現されるということは、本質に関する限りあり得ないからである。それゆえ、どんな物體的な形象によっても、靈的実体が、その本質に関する限り理解されることはあり得ないということになる。したがって、神は被造物の秩序全体を、靈的実体が物體的なものを超えている以上に凌駕しているので、なんらかの物體的な形象を超えて神は本質によって視られる。

また、以上のことは、事物をその本質で視るとはどういうことかを考えるならばっきり明白になる。すなわち、人間の本質を視る人というのは、本質として人間に当てはまること、例えば、人間の本質を理性なき動物だとして認識することが決してないが、そのようなことをなんであれ把握する人である。また、神について何が言われるせよ、それは本質として彼〔神〕に当てはまるが、ある被造の形象が神を、神について言われることすべてに関して再現するということはあり得ない。すなわち、被造の知性のうちには、生命と知恵と正義、そして他のそのようなもの、つまり神の本質に属するものすべてをそれによって捉えるのとは別の形象がある。したがって、被造の知性が、神の本質を、神がその本質によって、そのうちで見られ得るように再現する、なんらかの1つの形象によって形作られることはあり得ない。また、多くの形象によって形作られるなら、一性、すなわちまさに神の本質と同じものが欠けることになる。したがって、被造の知性が神を御自身として、その本質によって、なんらかの1つの被造の形象で、あるいは複数の形象で見るべく高められ得るということはあり得ない。

したがって、〔結論として〕残るのは、神がその本質によって被造の知性に視られるためには、神の本質そのものがそれ自体として、他の形象によってではなく視られる、詳しく言うと、被造の知性の神へのある種の合一によって視られるのでなければならないということである。それゆえ、ディオニュシウスは『神名論』の第1章でこう言っている。「最も至福なる目的を我々が達成する時、神は明らかになって、我々は、ある種の知性を超えて神の知に満たされるであろう」。

また、神の本質だけがこうなるのだが、知性が、どんな類似もなしにそれ〔神の本質〕と1つになり得るとするのは、神の本質そのものがその存在でもあるからである。このことは、どのような他のものの形相にも当てはまらない。それゆえ、あらゆる形相は知性のうちにあらねばならない。そしてそれゆえ、もしある形相が、それ自体として存在するがままに、知性に形を与えるものではあり得ない、例えば、天使の実体のようなものであって、それが他のものの知性によって知られるべき時は、このこと〔例えば天使の実体が他のものの知性に知られるということ〕は、知性を形作るそのなんらかの類似性によって起きるのでなければならないが、これは神の本質、すなわち御自身の存在のうちではおきる必要がないことだ。

そうであるならば、まさに神の直視を通して、至福なる精神は理解するはたらきのうちに神と1つになる。そしてそれゆえ、聖人たちのうちでは神が王であるので、彼ら自身もまた神と共に王であり、そしてそれゆえ、彼らの口を通して『黙示録』でこう言われている。「あなたは我々を、我らの神に対して王国とし、祭司とした。そして我々は地上の王となるだろう」。すなわち、神が聖人たちのうちで王になり、聖人たちが神と共に王になるこの国が、天の国であると、『マタイによる福音』第3章〔第2節〕で言われている。「悔い改めよ。天の国が近づいたからである」。

これは、天にあるということは神に帰せられていると言いたいのであり、天体に含まれているということではなく、天が他の被造の物体をすべて超えているように、すべての被造物を超えていることを表すための表現である。だから例えば、『詩編』第112篇ではこう言われている。「すべての民を超えて高くまします主、その栄光は天を超える」。そして、それゆえ、諸聖人の至福が天の国と呼ばれるのだが、それは、彼らの報いが天体のうちにあるからではなく、天を超える存在^Ⅵを觀照することのうちにあるからである。それゆえ、天使たちについて『マタイによる福音』第17章でこう言われている。「彼らの天使たちは天では常に、天におられる私の御父と顔を合わせている」。それゆえ、アウグスティヌスもまた『主の山上の説教について』で、『マタイによる福音』第5章〔第12節〕の言葉を解釈して、こう言っている^Ⅶ。「お前たちの報酬は天にたくさんある。ここで天と言われているのを私は、この目に見える世界の上の部分のこととは考えない。というのは、我々の報酬は目に見えるものとして集められているわけではないからである。そうではなくて、私は、靈的に堅固であること^Ⅷという意味で考える。そこには恒久的な正義が住んでいるからである」。

また、以上のこと、すなわち神のうちに永遠の生が存することは目的としての善とも言われる。ここでの言い方では、生命を与える靈魂のはたらきが生命と呼ばれている。それゆえ、生き方は、靈魂のはたらきの種類だけ区別される。そしてこれら〔靈魂のはたらき〕のうちで最も高度なのは知性のはたらきである。そして、哲学者〔アリストテレス〕によれば「知性のはたらきは命である」^Ⅹ。そして、はたらきは対象から形象を受け取るので、神性を直視することは永遠の生と呼ばれるのだ。『ヨハネによる福音』第17章〔第3節〕のあの言葉のように。「これぞ永遠の生、あなただけが真の神と知ることこそ」。

また、以上の目的としての善は、『フィリピの教会への手紙』第3章〔第12節〕のように、把握とも呼ばれる。「私は従います。なんらかの仕方では把握するために」。ここで把握という言葉がされているからと言って、包含することを意味しているわけではない。というのは、何か別のものに包含されているものは、全体がそれに含まれているが、被造の知性が神の本質を全体としてみることはあり得ないからである。すなわち、十全かつ完全な仕方での神の直視に至るといふようなことは。すなわち、神を視るというのは、見える限りで視るということで、神が見えるということは、御自身が真理であるという意味で明らかであることによる。このこと〔神が真理であるという意味で明らかであること〕は限りがなく、それゆえ、〔神は〕限りなく見えるのであり、理解する際の限りある力である被造の知性には相応しくないほどだ。それゆえ、神だけが、御自身の知性の限りない力によって無限にご自身を理解し、御自身を全体として理解することで御自身を把握している。また、聖人たちには把握が再度約束されている。なんらかの引き寄せという意味での把握であって、ある人がある人を追いかけて捕まえる時、彼を手で捕まえていられるなら、捕捉すると言ふようなものである。だから、『コリントの教会への手紙 二』第5章〔第6節〕にあるように、「我々が体のうちにある限り、神から離れてさすらっている。というのは、信仰によって我々は歩み、形によっては歩まないからである」。そしてなんらかのものから遠ざかれ

ば遠ざかるほど、彼のほうへと我々は伸びていく。しかし、我々がものを形によって見る時、我々は彼〔神〕を、我々自身のうちに捉え込んでしまうだろう。それゆえ、『雅歌』第3章〔第4節〕で、その靈魂が愛している人を問い求める花嫁は、遂に彼を見つけた時こう言っているのである。「私は彼を捉えた。決して離さないようにと」。

また、ここまで語ってきた目的としての善は、永久の十分な喜びをも有している。それゆえ、主は『ヨハネによる福音』第16章でこう言っている。「願え。そうすれば手に入る。お前たちの喜びが十分であるように」。しかし、どんな被造物に関しても喜びが十分であることは不可能で、神に関してのみ十分な喜びがあり得る。彼〔神〕には、まったく充実した善性があり、それゆえに、主もまた、忠実な僕にこう言っているからである。「お前の主人の喜びのうちに入れ」^{xi}、すなわち、お前の主人のことで喜べと。というのは、『ヨハネによる福音』第22章〔第26節〕にはこうあるからである。「お前は、全能のお方について喜びであふれるだろう」と。そして、神は特に御自身について喜ばれるので、忠実な僕は、その主人の喜びに入っていくと言われる。というのは、主は弟子たちに、『ルカによる福音』第22章〔第26節〕で約束して、こう言っているからである。「私こそがお前たちに、私に御父が私の国を用意してくれたように、私の国で私の食卓を囲んで食べ、飲むために用意するものだ」と。かの目的としての善のうちで、聖人たちが物体から成る食事をするのではない。彼らは物体に関わるものでなくなっており、食卓という語によって意味されているのは、神が御自身について有し、聖人たちが彼〔神〕について有している喜びにより元気付けられることである。

したがって、達成されるべき充溢した喜びは、それについて喜びがあるものだけでなく、喜ぶものの状態にも依っていなければならない。すなわち、それについて喜びがあるものを現前させるために、そして喜ぶ者の全情感が、愛によって喜びの原因にもたらされるように。また、かつて示した^{xii}ように、神の本質を直視することを通して、被造の精神は神を現前するものとして捉えている。また、直視そのものは、全体的に情感を、神への愛に前進せしめる。すなわち、どんなものであれ、それが愛すべきものであるのは、それが美しく善である限りでのことなら、ディオニュシウスが『神名論』第4章で言うように、神は、美と善性の本質そのものであるもので、愛抜きで見られるということは不可能だ。そしてそれゆえ、その〔神の〕完全な直視には完全な愛が伴う。それゆえ、グレゴリウスは『エゼキエル書』〔第2章第9節〕についてこう言っている。「ここで燃え始めている愛の火は、愛するものを見ているので、自らの愛のうちでさらに燃えている」。そして、現前させているものについての喜びは、より愛するほどに大きい。それゆえ、かの喜びは、喜びがある事物の側だけでなく、喜ぶ者の側でも十分になるということになる。そして、このような喜びは、人間の至福を完全なものにする。それゆえ、アウグスティヌスもまた、『告白』第10巻〔第23章〕でこう言っている。「至福は真理についての喜びである」。

さらに考えねばならないのは、神は善性の本質そのものであるもので、その帰結として彼〔神〕がすべての善なるものの善であることになる。それゆえ、彼〔神〕を視る時、すべての善を視ることになるのである。主がモーセに『出エジプト記』第33章〔第19節〕で言われたように。「私

がお前にすべての善を示そう」。したがって、その帰結として彼〔神〕を有するなら、すべての善を有することになる。『知恵の書』第7章〔第11節〕のあの言葉のように。「私のもとにすべての善が、それ〔知恵〕と一緒にやって来た」。そうであるならば、神を視る時、かの目的としての善のうちに我々は、すべての善を十分充溢して有している。それゆえ、忠実な僕に主は、『マタイによる福音』第24章で再び約束して下さったのである。「〔主は〕彼のすべての善の上に彼を立たせるだろう」と。

一方、悪は善に対立するので、すべての善が現前するなら、悪は全般的に排除されているのでなければならない。すなわち、「正義の分有は罪と共に」はなく、「光が闇と交わること」もない。『コリントの教会への手紙 二』第6章〔第14節〕で言われているように。かくて、かの目的としての善は、完全なる十分さが善すべてを有する者に生じるだけでなく、すべての悪と無縁になることで十分な安らぎと安全が生じる。『箴言』第1章〔第33節〕にあるように。「私の話を聞く者は、恐れることなく安らぐだろう。そして充溢を楽しみ抜くだろう。悪への恐れを取り除かれて」。

また、以上のことから、さらに伴うのは、そこには、いずれ来るあらゆる平和があるということである。すなわち、人間の平和は、ある場合には、内なる欲望の騒がしさによって、まだ持っていないものを持つと欲して、ある場合には、実際に感じているにせよ、あるいは感じることを恐れているにせよ、なんらかの悪による心労によって妨げられる。しかし、そこ〔かの目的としての善のもと〕では恐れることは何もない。すなわち、欲望の騒がしさは、すべての善が十分にあることでやむだろう。また、すべての外的な心労が、あらゆる悪の不在によってやむだろう。それゆえ、〔結論として〕残るのは、平和という完全な静まりである。以上のことから、『イザヤ書』第32章〔第18節〕ではこう言われている。「私の民は座るだろう、平和の美しさのうちに」。この言葉で、平和の完全さが指し示されている。そして、平和の原因を示すためにこう続く。「信頼の幕屋のうちに」すなわち悪への恐れを取り除かれて、「豊かな安息のうちに」すなわちすべての善があるという豊かさの1つのうちに〔座る〕と。

以上のような目的としての善の完全さは、永久に続くだろう。なぜなら、人間が享受する善の不足によって欠けるということがあり得ないから。というのも、そこにあるのは、永遠で滅ぶことがないものだからである。それゆえ、『イザヤ書』第33章〔第18節〕ではこう言われている。「お前の目はエルサレムを見る。豊かな都を。決して移されることがあり得ないだろう幕屋を」。そして、すぐに理由が続いて述べられている。「というのは、まったくそこにのみ、光輝ある主、我々の神がいらっしゃるだろうから」。すなわち、かの境地の完全さはまったく、神の永遠さを享けることによる。

同じくまた、かの境地は、まさにそこにあるものが滅ぶから不足が生じ得るということはない。というのは、そこにあるのは、本性的に滅ぶことがないもの、例えば天使だからであり、また、滅びないものへと移し変えられたもの、例えばそう移し変えられた人間だからである。「すなわち、この滅ぶものは、滅びなさを身にまとわねばならないからである」。『コリントの教会への手紙 一』

第15章〔第53節〕で言われているように。それゆえ、また『黙示録』第3章〔第12節〕でもこう言われている。「勝利する者、かの者を、私は、私の神の神殿の柱とする。彼は再び外に出て行くことはないだろう」。

また、かの境地には、それ〔その境地〕を人間の意志が嫌って背くことで、不足が生じ得るといふこともない。というのは、神、すなわち善性の本質はよく視れば視るほど、より深く愛さずにはいられなくなる。それゆえ、彼〔神〕を享けることがより強く欲せられることになるだろう。だから、『集会の書』第24章〔第29節〕ではこう言われている。「私を食べる者たちは、さらに飢えるだろう。また、私を飲む者たちは、さらに乾くだろう」。このことゆえに、神を視る天使たちについてもまた、『ペトロの手紙』第1章でこう言われている。「彼〔神〕を、見晴るかそうと天使たちは欲している」。

同じくまた、かの境地には、なんらかの敵が襲ってくることで、不足は生じないだろう。というのは、そこでは、悪による心労がすべてやむからである。だから『イザヤ書』第35章〔第9節〕のあの言葉がある。「そこにライオンはいないだろう」、すなわち、襲ってくる悪魔は。「また、悪しき獣も」、すなわち、悪しき人間も「それ〔悪しき獣あるいは人間〕によって高ぶることなく、そこには見出されないだろう」。それゆえ、主は『ヨハネによる福音』第10章〔第28節〕で、御自分の羊たちについて、永遠に滅んでしまうことはなく、御自らの御手で彼らを引き裂くこともないだろうとおっしゃっている。

しかし、かの境地は、神によってある人々がそこから締め出されるというような形で、限界あるものとなるということもあり得ない。すなわち、誰かがかの境地から、過ち、すなわちそこにはまったくないだろうことのゆえに押し出されるということはないだろうからである。そこにはあらゆる悪はないだろう。それゆえ、『イザヤ書』第60章〔第21節〕ではこう言われている。「あなたの民はみな義である」と。また、より善なる善へと進むために押し出されることもないだろう。すなわち、この世で神が時に、義人たちから霊的な慰めや、他の御自身の善いはたらきかけを取り除き、より熱心に求めるように、また自分の不足に気付くようにするようなことはない。というのは、かの境地に改良と前進はなく、〔我々の〕終局の^{xiii}完全さがあり、それゆえ、主は『ヨハネによる福音』第6章〔第37節〕で、「私のもとに来た者を、私は外に放り出さないだろう」とおっしゃっている。したがって、かの境地には、これまで述べてきたすべての善が永久にある。だから、『詩編』第5篇〔第12節〕でこう言われているのだ。「彼らは永遠に喜びに沸くだろう。そしてあなたは彼らのところに住まうだろう」。

したがって、先に述べた王国とは、すべての善が変わることなく十分にあるという意味での完全な至福である。そして、至福は人間に、自然本性的に欲せられるものであるので、その帰結として、神の国はすべての人に欲せられる。

第10章 国を手に入れることは可能であること

また、さらに示さねばならないのは、人間がかの国に到達しようということである。さもなくば、空しく希望し、開かれていることになる。まず、これは神の約束によって可能であることは明らかだ。すなわち、主は『ルカによる福音』第12章〔第32節〕でこうおっしゃっている。「恐れてはならない、弱き群れよ。お前たちの父にとり、お前たちに国を与えることは心に適っているからだ」。また、神が喜ばせてくださるはたらきかけ^{xiv}は、状態を整えるためのすべてを満たすのに効果がある^{xv}。だから、『イザヤ書』第46章〔第10節〕のあの言葉がある。「私の判定があるだろう。そしてすべての意志が私のものとなるだろう」。「というのも、彼〔神〕の意志に誰が逆らうのか」。これは『ローマの教会への手紙』第9章〔第19節〕で言われている。次に、このことは可能であることは、明らかな実例によって示される。

ここまで、アキノの聖トマスは、神学を短く編集したものを書き上げてきた。しかし、ああ、悲しいかな！死によって妨げられたために、彼〔聖トマス〕はこれ〔この綱要〕をご覧のように未完成のまま後に遺すことになってしまった^{xvi}。

文献表

テキスト

1. S.Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae*, in : *Opuscula Theologica*, vol.1, Marietti 1975
2. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae, Grundriss der Glaubenslehre*, uebersetzt von Hans Louis Faeh, Heidelberg 1963

-
- i modicus cibus non sufficit ad sustentationem naturae（以下ラテン語原文は文献表のテキスト1による）
 - ii felicitas
 - iii bene esse
 - iv tendit sufficientiam と読む。ちなみにドイツ語訳では、Daher kann das menschliche Begehren, das von Natur nach dem allgemeinen Gut strebt,（ドイツ語訳は文献表のテキスト2による）
 - v 本書第9章
 - vi 第55章
 - vii supercaelestis naturae
 - viii de sermone Domini in monte 1, 5
 - ix firmamentum

x 『形而上学』第4巻

xi 『マタイによる福音』第25章第21節

xii 本書第9章

xiii *finalis*

xiv *beneplacitum*

xv *efficax ad implendum omne quod disponit*

xvi この斜体で示した個所は内容からして明らかにトマス自身の手になるものではない。だが、よく知られている話では、晩年トマスは、それまで書いてきたことが「わらくずのように思える」ほどの啓示を神から受けて筆を絶ったということであるから、死に妨げられて完成させられなかったというこの記述はその話と食い違っている。